

場、この船舶が私のものである)ではなくて、ますますたゞ單に社會的所得の一定の分け前に對する請求權を意味するにすぎなくなつてゐる。私は無記名證券の形において出資證券を所持することによつて、この請求權を有してゐるのである。

(三)これらすべての變化からの結果として、ますますひろい範圍において一切の人が一切の人に經濟上倚存するやうになる。健全〔平常的〕な經濟の運営と、又したがつて各人の經濟的生存とは、あらゆる經濟主體の經濟企圖の成功を前提とするのであり、その成功にたいする「信賴」のうへに立つてゐるのである。貨幣の採用とともに始まつたところの、社會のあらゆる成員のあひだの社會的交錯性——*non as, sed fides* (銅ひはなく信賴)といふ語は貨幣についてもすでに妥當する——は、信用經濟によつて完成せる事實となつた。經濟はますます複雑に、ますます精巧に、ますます外的攪亂にたいして敏感になつてくるのである。

だが、かうした見方はすでに吾々をみちびいて、經濟過程の觀察を任務とするところの問題領域に踏み入れしめるものである。だからそれは、のちに吾々が高度資本主義の過程を追求するときに、はじめて充分に明瞭とされるであらう。本書第三篇をみよ。

たゞ最後にこの場所において私はマルクスが、私のこゝに試みたのと同様の仕方において信用經濟の意味を包括的に云ひあらはしてゐるところの、巧みな説明を少しく想ひ起しておきたい。彼はいふ(資本論第三卷第二冊一三二頁〔高昌氏譯普及版第五冊一三三頁参照])——「貨幣制度は本質上カトリック的であり、信用制度は本質

上プロテスタント的である。商品の貨幣存在は、證券の形において社會的存在をもつてゐる。幸ひならしめるものは信仰である。貨幣價值を商品の内在價值とする信仰、生産方法とその豫定秩序とへの信仰、個々の生産擔當者たちを單に自己増殖する資本の人格化にすぎぬとする信仰。けれどもプロテスタントイズムがカトリシズムの基礎から解放されてはゐないと同様に、信用制度もまた貨幣制度の基底から、解放されてはゐないのである。」それは私が右に詳細に説明しようとしたところの思想にほかならない。

(第一分冊終り)

譯者略註 (括弧内の數字は頁數を示す)

- 一(三) 期 Epoche.
- 二(三) 期代 Periode.
- 三(三) 時代 Zeitalter.
- 四(四) コークス精鍊法。その重要性はのちに本文中に説明されてゐる。本文二〇六頁以下及び一六八頁参照。
- 五(五) ナウマン Friedrich Naumann 基督教的社會改良主義者として有名。殊にその思想は第一次歐洲大戰前後のドイツに深い影響を與へた。
- 六(五) フレンゲ Johann Plenge. ナウマンとはく同時代の思想家。その立場は一層急進的である。
- 七(八) フォルアルルマルク Vorarlberg チロルの西部、ボーデン湖の東南方に位する古都。
- 八(八) ロッツ Lodz. ポーランド、ワルソーの西南八十二哩。中世都市から發達した工業都市。
- 九(九) 基礎 Grundlagen. 本書第一篇の全部はこの基礎構造を論じてゐるのである。
- 一〇(一〇) 構成 Aufbau. 本書第二篇の全部は、之を論ずるためのものである。
- 一一(一二) ウォルフ J. Wolf. ドイツの著名な經濟學者。マルキシズムに對立して特色ある立場を示してゐる。ここに引用されてゐる「社會主義と資本主義社會秩序」は、かれの三十歳の作である。
- 一二(一二) シュモラー Gustav Schmoller. 新歴史學派の巨匠。「綱要」とあるのは、いふまでもなく彼の著 Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre.

- 一三(一二) ウェーバー Max Weber. その經濟史は彼の死後に公刊された名著。黒正殿氏の邦譯がある。
- 一四(一五) Der Proletarische Sozialismus, 2 Bde. 一九二四年初版。その性質・内容については附録「ゾムバルトの學說と生涯」の中に詳述しておいた。
- 一五(一九) ミネルヴァの梟。梟は知識の神ミネルヴァの象徴である。文化の終末期に人間の知識が自覺的となることを比喻して「ミネルヴァの梟は夕闇の近づくとともに現はれる」といつたヘーゲルを暗示してゐるのである。
- 一六(二〇) ダイダロス。ギリシア神話によれば、彫刻師ダイダロスは空中を飛ぶ翼をつくつて、其の息子とともにクレテ島から地中海をこえてイタリーへとはうとした。
- 一七(二〇) Introite, nam et hic Dii sunt. このラテン語引用の出所は、遺憾ながら譯者には不明。
- 一八(二三) 註一四をみよ。
- 一九(二三) 社會科學及び社會政策雜誌。Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, ゾムバルトはその編輯者の一人である。
- 二〇(二三) ブルジョア。Bourgeois. このゾムバルトの著書については附録「ゾムバルトの學說と生涯」を参照。
- 二一(二三) 社會經濟學綱要。Grundriss der Sozialökonomik. これはマックス・ウェーバーの編集になる論文集である。
- 二二(二四) ユダヤ人。Die Juden und das Wirtschaftsleben (ユダヤ人と經濟生活)。一九一一年初版。これについては附録「ゾムバルトの學說と生涯」を参照。
- 二三(二四) ブルジョア。Bourgeois. 註二〇をみよ。
- 二四(二七) カルヴェニズム學說。ウェーバーの著名な論文「プロテスタント倫理と資本主義の精神。」經濟學名著翻譯叢書(有斐閣)の第四卷に拙譯と解説がある。

- 二五(二七) ブルジョア。註二〇をみよ。
- 二六(二七) 資本の増殖欲望。Verwertungsstreben des Kapitals.
- 二七(三二) クルト・フライジゴ。Kurt Breyig, Individuum und Masse, 1925.
- 二八(四三) シヤスポー銃。フランス人シヤスポー (Chassepot) の發明した銃。
- 二九(五〇) 無制限 schrankenlos. 無條件 unbedingt. 顧みるところなき rücksichtslos.
- 三〇(五〇) 時間は場所に先だつ。Zeit geht vor Raum.
- 三一(五四) 物化 Versachlichung. 註三七をみよ。
- 三二(五七) 信仰の確かさの問題。ここではゾムバルトは、上述したマックス・ウェーバーの「カルヴェニズム學說」を暗示してゐるのである。註二四参照。
- 三三(五七) この詩はシラー作「鐘の歌」からの引用である。(鐘の歌、三一八—一九行)
- 三四(六四) つねに悪を欲しつゝつねに善を生む。ゲーテのファウストの中にある有名な文句で、メフィストフェレス(惡魔)が自己の本性についていふ言葉である。ファウスト第一部。
- 三五(六四) ラゲルデルの著「サンディカリズムと社會主義」H. Lagardelle, Syndicalisme et socialisme. ゾムバルトはここにはフランス語のまま引用してゐる。
- 三六(六七) プレオネクシー Pleonexie. 富を持てるものがますます持たうとする欲望。ギリシア哲學者たちの最初に用ひた言葉で、ギリシア語 pleon (ヨリ多く) と exia (exein「持つ」の名詞形、即ち所有)との合成語である。
- 三七(六八) 物化。Versachlichung. これは人格化 Persönlichung の反對を示す言葉である。即ち非人格化 Entpersönlichung である。

- 三八(七二) ドイツ經營技術協會、Arbeitsgemeinschaft deutscher Betriebsingenieure.
 三九(七四) 同一化 Vereinheitlichung: 經濟活動の諸形態があらゆる場所において同一となること。このことはとくに本書第三篇に詳論されてゐる。
 四〇(八〇) 十九世紀のドイツ國民經濟。このゾムバルトの著書については附録「ゾムバルトの學說と生涯」参照。
 四一(八〇) 社會經濟學綱要。これはマックス・ウェーバー編纂の論文集(Grundriss der Sozialökonomik)。本書二三頁註二一参照。
 四二(八六) ボツシユ Roche, フン Hun. いづれもドイツ民族にたいする罵言である。ボツシユは主にフランスで用ひられるもので、もと「放蕩者」とか「悪評高き婦人」の意味であつたといはれる。
 四三(九二) 實在論的國家觀。realistische Auffassung des Staates. これは本文前頁にある「唯名論的」國家觀に對立するもので、國家自體(即ち個人を超越する全體的國家)の實在を強調する立場をいふ。
 四四(九三) 主觀的權利の體系。System von subjektiven Rechten. すぐ次ぎにいはれてゐる「個人的自由權の體系」と結局同意義である。
 四五(九五) 居住義務。Schothenpflichtigkeit. 領主の許可なしには他の領地へ移住しない義務。中世後期から近世へかけて歐洲の農民の大部分は、かうした義務をもつ農奴(Hörige, Leibeigene)であつた。
 四六(九五) 耕地強制。Flurzwang. 農業革命の以前には、農地の耕作は村落全體により共同的におこなはれ、個々人が自由にするには出来なかつた。これを Flurzwang といふ。
 四七(九五) 補助勞力。Hilfskräfte. 中世のギルドは各組合員(即ち親方)の使用する労働者数を限定してゐた。それは主として富の不均衡な蓄積を避けるためであつた。これについては例へば本位田祥男、英國經濟史要(日本評論社)改訂版七九頁参照。

頁参照。

- 四八(九五) 住民權の制限。中世の都市はしばしば外部からの移住に制限を加へてゐた。それは都市人口の増加によつて市民の職業の脅かされることをおそれたためである。
 四九(九六) 倉庫權。Stapelrecht. 倉庫といふのは領主や都市によつて設けられるもので、商人の運搬貨物を全部ここに一應集めさせて、徵稅その他の統制に服せしめるものである。譯者の小論文「バーゼル市を中心とする歐洲中世の商業路」(社會經濟史學九の三、昭和十四年)には、かうした中世商業の特質が描かれてゐる。
 五〇(九七) ヒドロロミー。Hydroromie. キリシア語 hyle (物質)と dromos (測定)との合成語。物質測定法。
 五一(一〇〇) 周知のやうにユダヤ人は中世期以來、宗教上・社會上の理由によつて迫害されてゐた。その結果たとへば英國においては十三世紀以來ユダヤ人追放令が發布されて、すべてユダヤ人は國外に追放され、その財産も沒收されるに至つた。
 五二(一〇〇) 金羊毛團。Golden Fleece. 一四二九年に創立されたキリスト教的騎士團で、歐洲諸國において政治的にもかなりの勢力を有してゐた。農村の織匠の英國における歴史的役割については、大塚久雄、歐洲經濟史序説(時潮社)一五八頁以下。同氏論文「農村の織元と都市の織元」(社會經濟史學八の三・四、昭和十三年)に生々と描かれてゐる。
 五三(一〇一) 圍ひ込み。Enclosure. これは「綜劃」とも譯す。その英國における過程については、例へば本位田祥男、英國經濟史要、改訂版二一三―一八頁参照。
 五四(一〇一) Ashley, W. J., An Introduction to English Economic History and Theory, 1909. 等の他。
 五五(一〇一) トマス・モールズ。Thomas Morus. これはモリア(Thomas More)のラテン名。彼のユウトピア(この書は最初はラテン語で書かれたもの、初版二〇五年)は當時の社會狀勢を示すものとして有名であるが、その中でモリアは農村における土地兼併の實狀を「誇張的」に描いてゐるのである。邦譯岩波文庫版五〇―五三頁。なほ大塚久雄、歐洲經濟

史序説、一一六一—一八頁参照。

五六(一〇二) ローラン夫人。Me Roland. フランス大革命時代の進歩的女性。ヴォルテール、ルソー、デイドロー等の思想的影響を受け、革命の勃發とともに、ジロンド黨を支持して活躍したが、一七九三年夫ローラン氏とともに捕はれて、ギロチンの露と化した。その最後の言葉は「おゝ自由よ、汝の名においていかに多くの罪惡のおこなはるゝや」であつた。手記(Memoires)はとくに有名である。

五七(一〇七) 神聖なる利己主義。sacro egoismo. これはムツソリーニの言葉として有名。

五八(一〇八) 一八六〇年のこの通商條約はコブデン條約ともいはれるもので、自由通商の原理を基礎とし「最惠國約款」を最初に規定したものとして有名である。當時英國にはコブデン、ピール、グラッドストーン等、またフランスにはシユヴェアリエ等の政治家があつて、自由通商主義を高調しつゝあつた。

五九(一〇九) ブラッチフォード。Blatchford. 英國の社會主義的思想家。その明快な筆致によつて大衆の中にも可なり親しまれてゐる。「英國人のための英國」(Britain for the British)「メリー・イングランド」(Merle England)「神とわが隣人」(God and My Neighbour)等の著がある。

六〇(一一〇) ローン Roon. プロシアの將軍。普墺戦争及び普佛戦争の指揮官として名を馳せ、しばしばプロシアの内閣にも加はつて活躍した。一八〇三—一七九年。

六一(一一一) 「おこなふとほりに言ふものはない。」So was tut man, sagt man aber nicht. どんな人でも言行は一致しないとの意。

六二(一一三) セシル・ローズ Cecil Rhodes. 英國の企業家にして政治家。牧師の子。早くから南アフリカにわたり、その開發事業(ことに金剛石)に専念して成功し、政治的にもまた大いに活躍して、英國植民政策の成功の基礎をきづいた。プ

ーア戦争の混亂の頃に死した。一八五三—一九〇二年。

六三(一一四) キアフタ。Kiachta. 蒙古との國境に近いシベリアの都邑。支那とロシアの間の通商上の一據點。ウランベートル(現在における外蒙共和國の首都)の少しく北方に位する。

六四(一一五) アルフレット・ウェーバー。Alfred Weber. ドイツの社會學者。有名なマックス・ウェーバー(註一三をみよ)の弟である。

六五(一一七) 本質性(Wesenheit)といふ語は、嚴密には本質(Wesen)と必ずしも同じではない。それは「狭義における本質」(essentia i. e. S.)といはれることもあるが、この場合にはそれほど嚴密に區別する必要はないものと思はれる。

六六(一二〇) シュムペーター。(Joseph Schumpeter) はゾムバルトと同様に帝國主義をもつて資本主義に特有なものは考へない。彼は今日の帝國主義と封建主義との類縁關係を強調してゐる。

六七(一二七) ドナウ國際委員會。Internationale Donaukommission. ドナウ河の航行自由を保障するために、一八五六年クリミア戦争後に結ばれたパリ條約によつて設置された委員會。歐洲の七ヶ國からの委員によつて構成されたが、のちにルーマニアを加へて八ヶ國となつた。歐洲戦争の勃發とともにおのづから解消した。

六八(一二七) セーヴル。Severes. パリーの西南六マイルの地にある工業都市。メートル法採用のための國際協定(一八七五年)によつて、この地に國際度量衡局が置かれることとなつた。

六九(一二七) ヨンゴ會議。Kongokonferenz. 一八八四年十一月から翌年まで、歐洲諸國によりバルリンで開催された會議である。これによつてコンゴ河流域地方は「對コンゴ國際協會」の開發に委ねられることとなつた。

七〇(一三五) 新アトランティス。Nova Atlantis. この大哲學者(フランシス・ベーコン)の政治小説であつて、彼の社會理想を吐露したものと興味がふかい。アトランティスといふのは往古大西洋上にあつたといはれる傳説上の文明國である。

- 七一(一三五) 翰林院。ここに翰林院といふのは一八八六年ベルリン郊外 Charlottenburg にシーメンスが創設した「物理技術學會 (Physikalisch-Technische Reichsanstalt)」のことである。
- 七二(一三六) 精神的構成體。Geistgebilde。この語は科學、技術、法律、藝術、宗教等のやうな人間精神の産物を指すものであるが、なほ廣義においては國家、家族、教會等のやうな社會的構成體をも包括して用ひられてゐる。
- 七三(一三七) オイレル。Leonhard Euler (一七〇七—一八三三) スキスの數學者。
- マクローリン。Colin Maclaurin (一六九八—一七四六)、スコットランドの數學者。エジンバラ大學教授となる。
- ラグランジュ。Comte Lagrange (一七三六—一八一三)、フランスの著名な數學者、物理學者。
- 七四(一三七) ボアソン。Louis Poinsot (一七七七—一八五九)、フランスの幾何學者。Éléments de Statique等の著書がある。マイヤー。Robert von Mayer (一八一四—一八七九)、ドイツの物理學者。エネルギーの保存及び轉換の理論により學界に貢獻した。
- 七五(一三七) ラヴォアジエ。Antoine Laurent Lavoisier (一七四三—一七九四)、有名なフランスの化學者。近代化學の祖。フランス革命の渦中にその犠牲となつて刑死した。
- ブリストリー。Joseph Priestley (一七三三—一八〇四)、英國の自然科學者。酸素の發見その他により有名。
- 七六(一三七) ヴェーレル。Friedrich Wöhler (一八〇〇—一八八二)、ドイツの化學者。一八三六年ゲッティンゲン大學教授となる。リービッヒ。Justus v. Liebig (一八〇三—一八七三)、有名なドイツの化學者。ヴェーレルとも共同研究をして多くの業績をのこした。
- 七七(一三七) ケケレ。Friedrich August Kekulé (一八二九—一九〇六)、ドイツの化學者。リービッヒに刺戟されて化學研究に入り、のちにボン大學の教授となつた。

ヴァントホッフ。Vant Hoff (一八五二—一九一七)、オランダの化學者。フランスの化學者バスターールの後をうけて立體化學の建設者となつた。

- 七八(一三八) 本質性。——註六五をみよ。
- 七九(一三九) この詩はシラー作「ギリシヤの神々」からの引用である。(ギリシヤの神々、第十四節。)
- 七九A(一三九) ニーブ。A. Ure 英國の經濟學者。History of the Cotton Manufacture. 及び Philosophy of Manufactures, 等の著がある。ここに引用されてゐる語は、おそらくこの後者からの引用と思ふ。
- 八〇(一四〇) 精神的構成體。Geistgebilde。註七二をみよ。
- 八一(一四三) ピテカントロポス。Pithekanthropos。ジャバにおいて發掘(一八九一年)された遺骨で、最古の人類に屬するものと考へられてゐる。
- 八二(一四四) マンデヴィル。Mandeville。あの「蜜蜂物語」によつて有名な英國の諷刺的思想家。一六七〇—一七三三年。ここに引用されてゐる「宗教についての自由なる省察」はその晩年の著である。蜜蜂物語(これは個人の罪惡たる利己主義が社會の幸福の源泉であることを説いたものとして重視される)は、元來當時の英國の政治狀態を諷刺しようとしたものである。
- 八三(一四七) アウグスト・ケケレ。註七七をみよ。
- 八四(一四七) ラロー。Reaumur。フランスの物理學者。
- 八五(一五三) 職業的發明家と譯した原語は Erfindersunft, 即ち多數の發明家から成る専門社會。
- 八六(一五四) カートライト。Edmund Cartwright。力織機の發明家として有名。英國人。一七四三—一八二三年。アークライトの紡績工場(この工場ではまだ水力を用ひて糸を紡いでゐたにすぎない)を見學したのが動機となつて、この劃期的

發明を完成した。

八七(一五四) ヘンリー・ロート。Henry Cort。製鋼法の改良者、英國人。一七四〇—一八〇〇年。攪煉(Puddling)と呼ばれる製鋼法を最初に發明したのは彼であつて、後年のマッセマーの製鋼法はこれを更に完成したものである。

八八(一五四) エルンスト・ソルヴェー。Ernst Solvay。

八九(一五四) ホーファン。August Wilhelm Hofmann (一八一八—一九二二) ドイツの化學者。有機化學の領域で多くの功績をのこした。

九〇(一五四) バイエル。Johann Friedrich Wilhelm Adolph von Baeyer (一八三五一—一九一七)、有名なドイツの化學者。アスピリンの發明者として廣く知られてゐるが、その最大の業績は人造藍の研究であつた。久しくミュンヘン大學に講座をもつてゐた。

九一(一五四) ハーバー。Haber。第一次歐洲戰爭中、その劃期的發明(空中窒素固定法)を完成した。

九二(一五四) ガウス及びウエーバー。本文一三七頁をみよ。

九三(一五四) ネルンスト。Walther Nernst (一八六四—)、ドイツの化學者で「ネルンスト燈」とよばれる照明装置の發明者である。

九四(一五五) ヘルツ。Heinrich Rudolf Hertz (一八五七—一九四) 電波の發見者として有名なドイツの物理學者。マルコーニの無線電信の發明(その英佛海峽における實驗は一八九九年)がその應用であることは云ふまでもない。

九五(一五七) ハーグリーブズ。James Hargreaves (一七七八死)、ジェニイ紡績機(spinning jenny)の發明者。これはアークライトの紡績機械(註八六をみよ)の基礎をつくつたもので、劃時代的意義をもつものである。

九六(一五七) マッセマー(英人、一八一三—一九八年、註八七をみよ)の製鋼法の原理は、その過程において燃料を直接使用

せずに、大量の空氣によつて銑鐵中の炭素、燐等を酸化せしめることにある。マッセマーはこの新方法を實行するために、みづから資本を借入れて新たに工場を建設した。近代製鐵業における英國の指導的役割は、この彼の發明と深い關係をもつてゐる。

九七(一六四) 本質性。註六五をみよ。

九八(一六六) アブラハム・ダービー。Abraham Darby。石炭乾溜によるコークス製造法の發見者。今日の製鐵過程においてはコークスは不可欠であり(鐵鑛石にコークスを混じて熔鑛爐に投入するからである)、従つてダービー父子によるこのコークスの發明は、近代製鐵業の飛躍的發展(ダービーは英人であり従つてこの飛躍はまづ英國におこつた)を可能にしたものである。

九九(一六六) キャロン工場。スコットランドのキャロン(Caron)は人口二、三千の小邑にすぎないが、このローバック(Roebuck)の製鐵工場が建設されて以來、製鋼業をもつて其の名を知られ、今日なほ各種鐵工業が盛んである。

一〇〇(一六六) 攪煉法。註八七をみよ。

一〇一(一六七) ソルヴェー。註八八をみよ。

一〇二(一六九) この點については本文二〇六頁以下及び註九八をみよ。尙ほ本文四頁註四参照。

一〇三(一七一) 方法。原語は Verfahren 或ひは Verfahrungsweise。遣り方、手続きといふ意。

一〇四(一七四) 纖維化法。Zelluloseverfahren。パルプの製造過程において碎木機を用ひずに、苛性曹達、亞硫酸石灰等の藥品により木材中の非纖維素分を溶解する方法。この方法は吾國においても盛んである。

一〇五(一七四) ホーファン。註八九をみよ。

一〇六(一七四) シャプタル。Jean Antoine Chaptal (一七五六一—一八三二) フランスの化學者。諸種の實際價值のある發

明をのこした。

- 一〇七(一七六) 作業機。Arbeitsmaschine. 工作機械。Werkzeugmaschine.
- 一〇八(一七七) この行以下の統計は、原書では巻末の訂正表にかゝげられてゐるものである。もとの記述には、次ぎの簡単な数字だけが示されてゐる。

機械工業従業員の数は、次ぎのやうに増加した(ドイツ)。

一八八二—一八九五年	五〇%増	人口は僅に一五%増
一八九五—一九〇七年	一三五%#	#
一九〇七—一九二五年	[数字の記載なし]	一九%#

- 一〇九(一八〇) ナスミス。James Nasmyth. (一八〇八—九〇) 英國人、技師。太陽黒點の最初の観測者としても有名。その父も兄も風景畫家であつた。
- 一一〇(一八〇) ベッセマー。註九六及び八七をみよ。
- 一一一(一八一) シャップ。Claude Chappe. (一七三六—一八〇五) フランスの物理學者。一七九二年電磁石を用ひない一種の電信機を發明し、パリ附近で實驗に成功した。
- 一一二(一八三) ダイムラー。Gottlieb Daimler. (一八三四—九〇) ベンツ Benz. いづれもドイツ人。ベンツはダイムラーの考案を利用して石油發動機による乗用車運轉に成功した。
- 一一三(一八四) ルイス・パウル。Lewis Paul. 一七四一年ローラーを用ひる一種の紡績機を發明して、ハーグリーヴスの紡績機の魁けをなした。
- 一一四(一八五) ハーグリーヴズ。註九五をみよ。

- 一一五(一八五) カートライトについては註八六をみよ。
- 一一六(一九八) ヘルゴランド。Helgoland 或ひは Heligoland. 北海(Nordsee)上にあるドイツ領の孤島。峻険な岩石から成り長さ一マイル、幅三分の一マイルに充たないが、北海航行の要衝にあり、大戦中にはドイツ海軍の根據地として大きい役割を演じた。
- 一一七(二〇〇) ラムゼス二世。Ramesses II. 古代エジプト第十九王朝の王である。勇敢にして高慢な支配者であり、又おほくの建築をも營んだ。舊約聖書出埃及記のバロは、このラムゼス二世であるともいはれる。十九世紀末葉に發見されたそのミイラは現存する最も完全なものである。
- アモン(Amon)は大陽神ラーの別名。
- 一一八(二〇〇) ナスミス。註一〇九をみよ。
- 一一九(二〇九) ミュンヘン・グラードバッハ。München-Gladbach. ライン河中流デュッセルドルフの西にある工業都市で、ミュンヘン・グラードバッハ或ひは單にグラードバッハとよぶ。古い歴史的都市であるが、現在では殊に紡績業及び綿織業をもつて知られてゐる。
- 一二〇(二一七) ランダウアー Carl Landauer. ドイツの經濟學者。一八九一年生れ。その立場は社會民主主義的であるが、主觀價值説を採用して教ふる所が多い。その名著「計畫經濟と流通經濟」には譯者の邦譯がある。
- 一二〇(二三三) この引用は、譯者の調べたかぎりではチルゴアの「富についての省察」の中には見當らない。おそらくチルゴアの他の論文から引用したものと思ふ。なほ原著ではフランス語のまゝ引用されてゐる。
- 一二一(二三三) この引用は國富論第二篇第一章(氣賀氏譯岩波文庫版三五四頁参照)。
- 一二二(二三三) シュトナ Storch.

- 一三三(二二五) ラウ Rau.
- 一三四(二二五) ウィッテルスヘーフェン Wittelshofer.
- 一三五(二二八) 人件資本 Personalkapital. 物件資本 Realkapital.
- 一三六(二二九) 生産的資本 produktives Kapital
- 一三七(二二九) 分散的資本 distributives Kapital.
- 一三八(二二九) 生産資本 Produktionskapital.
- 一三九(二三〇) 動産抵當貸 Lombardges häfte. 註一五六をみよ。
- 一四〇(二三一) シスモンチ Sismondi. その主著 Nouveaux principes d'économie politique. を指す。
- 一四一(二三五) 歸屬計算 Zurechnung の問題については附録「ソムバルトの學說と生涯」にも簡單ながら觸れるつもりである。
- 一四二(二三六) 勢力と經濟法則。この二つは從來對立するものと考へられ「勢力が經濟法則か」(Macht oder ökonomisches Gesetz?)の問題はことに(第一次)歐洲大戰後のドイツ經濟學界において、重要な論争の題目とされたのである。
- 一四三(二六三) アスター家 Astors.
- 一四四(二七三) アリゾナ・モレンシ 製銅會社。Arizona Morenci Copper Company.
- 一四五(二七五) プレミアリー・デナムーム會社。Premier Deferred.
- 一四六(二七五) ランド・マインズ會社。Rand Mines.
- 一四七(二七五) フェライラ會社。Ferreira.
- 一三八(二七七) 「ブルジョア」Bourgeois. 註二〇をみよ。

- 一三九(二七八) この「清教徒的特質」と資本主義との關係については拙譯(マックス・ウェーバー)「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」参照。尙ほ註二四をみよ。
- 一四〇(二七八) 物化。Versachlichung.
- 一四一(二八一) 上掲書とあるのは Henry Ford, Mein Leben und mein Werk. (フォード著、わが生涯と事業)
- 一四二(二九〇) ザウエルズベック。Sauerbeck.
- 一四三(二九二) 生産的信用。Produktives Kredit.
- 一四四(二九二) 生産信用。Produktionskredit.
- 一四五(二九四) このクニースの信用理論については K. Knies, Geld und Kredit, 1873. 参照。
- 一四六(二九四) 委讓信用。Übertragungskredit.
- 一四七(二九四) 指圖信用。Anweisungskredit.
- 一四八(三〇五) 月末資金。Utimogeld.
- 一四九(三一四) ハスキントン。William Huskisson 英國の政治家。一七七〇—一八三〇年。
- 一五〇(三一四) バジョット。Bagehot. 本書本文五九頁をみよ。
- 一五一(三二〇) ジョン・ロー。John Law. スコットランド生れの有名な銀行家。一六七一一七二九年。若くしてオランダに渡り銀行業務を學び、一七〇〇年にはスコットランド政府に發券銀行の設立を提言した。のちフランスに渡り、パリにおいて私設銀行を創設し、同國の金融業の發展に大きい影響をあたへた。本位田祥男、英國經濟史要、改訂版一五五頁等参照。
- 一五二(三二〇) ウェリアム・バタソン。William Paterson スコットランドのダムフリース州生れの銀行家。一六九一年英國に發券銀行設立の提案をなしたが、その提案は一六九四年英蘭銀行の創設として實現された。翌一六九五年まで英蘭

銀行取締役の地位にあつた。(一六五八一―一七一九年)

一五三(三二二) モンティ。Monti は「山」或ひは「群」を意味するイタリア語であるが、ここに言はれてゐるのは中世紀イタリアにおいて國家(獨立都市の政府)にたいして必要な財源を貸付け、そのかほりに租税その他の國家收入を擔保として與へられてゐた商人の組合のことである。「モンティ・ディ・ピエタ」は「信仰の群」の意味のイタリア語で、寺院を中心としてイタリア各所に發生し、一般から預金を吸收して貸出しを行つてゐたもののやうである。モンティについては、例へば R. Ehrenberg, Das Zeitalter der Fugger, I. Band, S. 38 等を参照。

一五四(三二八) ウキリアム・パターソン及びジョン・ロー。註一五一及び一五二をみよ。

一五五(三二九) 動産信用銀行 Crédit Mobilier. 不動産信用銀行 Crédit Foncier の二つは、本文にも説明されてゐるやうに最初の近代的株式銀行として重要なものである。前者は農業改良及び土木建築のために資金を貸付けたのである。その創設者は本文のすぐ前にあるペリル兄弟(Gebrüder Perle)であつた。

一五六(三三〇) 動産抵當業務 Lombardgeschäft これをロムバードといふのは、イタリアのロムバード地方の商人(その實は該地方のみでなくイタリア各地の商人)が中世末葉から近世初期にかけて英國、フランス等に移住し、主として動産抵當による金融業をいとなんでゐたといふ來歴によるのである。ロンドンのロムバード街も、かうしたイタリア商人の居住地の名残を示すものであることは、周知のとほりである。

一五七(三三三) 動産銀行。註一五五をみよ。

(譯者略註終り)

附 録

ゾムバルトの學說と生涯

一 現代の巨匠ゾムバルト

本書の原著者ウェルナー・ゾムバルトについて、その生涯や思想のあらましを敘述することは、譯者にとつて一つの愉しき義務であらう。さう考へつゝしばらくの間準備をしたのちに、私は再びこの仕事が無益なことではないかとの懐疑を味はねばならなかつた。すべて經濟學の初歩を知るものにその名を知らぬものはなく、近代資本主義或ひは高度資本主義といふ言葉すらも彼の著書に由来し、その業績を想起せしめるほどに高名なこの著者について、今さら私のやうなものが何を喋々する必要があらうか。經濟學上において彼の著が古典とされてゐるのは、恰かもゲーテやハウプトマンの著作が文學上古典であるのと、もはや同様であるといつてもよからう。誰人が今さらゲーテの生涯を更めて「紹介」するであらうか。——だが、かやうに躊躇してゐる一方、私にはもう一つの想念が湧きおこり、その想念はつひに確信となつて、いまやほとんど前のやうな躊躇を追ひ拂ふに至つた。その想念といふのは、端的にいふなら、この比類のない巨匠の名がかくまで人口に膾炙してゐるにも拘はらず、その思想の全面的構造と發展とは、必ずしも正當に理解されてゐないのではないかといふことである。まことにゾムバルトの著「近代資本主義」を知るものは多いけれども、「近代資本主義」の著者ゾムバルトを知るものは僅少であらう。ことに最近、彼の思想はその晩年期に入るとともに、ますます完成の域に達してゐるのであ

り、そのすぐれた思想のうちには新しい時代の黎明を暗示するものが少なくないのであるが、今日の思想界はも早や彼の「左翼時代」にせめしたやうな關心を、この晩年の巨匠に與へようとはしないもののやうである。かつてはマルクスかゾムバルトか (Marx vers. Sombart) とまで稱揚され、諸國の民衆にかつき上げられたゾムバルトは、その後の思想的精進にもかゝはらず、人々の注目をひくことがあまりにも少いのである。

かういふ不人氣(といつても相對的に、彼の眞價に比してのことであるが)はどこからきてゐるのか。それには種々の見方があらうけれども、私は次ぎの二つの點が最も大きい原因であるとおもふ。

第一は彼に對する誤解、詳言すれば、彼が左翼運動の裏切りものとして、久しいあひだ非難されてきたといふことである。今日においてさへ、もつばらかうした觀點のみから彼を眺めてゐる人が可なり多いやうである。マルキシズムのうちに若き日のゾムバルトが、最も多く共鳴するものを見いだしたといふこと、そしてそれへの傾倒が彼の思想の發展における出發點の一つであつたといふことは、彼の名を知るすべての人の熟知してゐるとほりである。そしてその彼が、のちに(第一次)世界大戰の前後における思想的、社會的な嵐のうちに、つひにマルキシズムの基本理論を抛棄するに至つたことも、有名な一事實である。けれども——のちに詳述するやうに——彼がかやうにマルキシズムを奉じてゐると考へられ、彼自身もさう考へてゐたときにさへ、彼は決して多くの人々の考へるやうな單なる「唯物論者」ではなかつたのであつて、あの「轉向」によつて彼が突如として豹變したやうに考へることは、淺薄な見方といはねばならない。その轉向が眞實にはどんな意味のものであるかは、の

ちに詳述するであらう。——とはいへ、この轉向によつて彼が思想の節操を知らぬものかのやうに思はれたのは、避けがたい事柄であつた。そしてそれ以來、左翼或ひは左翼の傾向をもつ人々は、その「聖者列傳」の目次から彼の名を除いてしまつたのである。と同時に、いはゆる純粹理論の追求者たちもまた、變節漢の烙印をもつ者の所論に耳を藉すよりは、むしろ「血統の正しい」他の人々の教説に走つたのである。

第二は時代の潮流である。(第一次)世界大戰は、ドイツの民衆を極度の窮乏のうちに陥れた。この時代の深淵のなから新たに湧きおこつたものは、いふまでもなくナチスでありその思想であつた。民族の血と力とは讚美され、絶望せる民衆のまへにかゝげられた唯一の旗印は「純粹なる」民族の形成と發展とであつた。この澎湃たる國民的運動のまへに、自由主義の社會と自由主義の思想とは、一夜の夢と化したのである。かつて尊敬されてゐたものは輕蔑され、それに代つて新しく時代の寵兒となつたのは、全體主義の哲學者であり、民族主義の社會思想家であつた。もちろん、ゾムバルトは決して普通の意味での自由主義者ではなく、また世界主義者でもない。ことに文化發展のうちに國家のもつ役割を、彼は早くから明瞭に認識し強調したものの一人であつた。このかぎりにおいて彼の思想は、ナチズムの正反對をなすものでは決してない。けれども、それと同時にまた彼の思想のなかには、ナチス第三帝國の世界觀とは、到底相容れないものゝ含まれてゐることは否定されえない事實である。そのことはすでにナチスの代表的思想家たちによつても氣づかれてゐるものと思はれる。たとへばゾムバルトが民族有機體説を謬見として、拒否しつけてゐることはその一つである。また彼が科學と世界觀との

結合を不合理として排斥してゐることは後述するとほりであるが、この彼の立場もまた、少くともナチスの文化的指導者たちの抱懐する理想からは遠いものといはねばならない。かうした事情もまた、今日ゾムバルトが時代の脚光のうちに現はれないことの、有力な理由であると思はれるのである。

だが、かうした状態にもかゝらず、今日ゾムバルトが現存する最大の経済思想家の一人であることを否定しようとする人は、一人もないであらう。彼の立場をそのままに受容しようとしなないドイツの経済學界でさへも、彼が今日ドイツ経済學の最大の誇りであることを認めるに吝かではなかつた。^(註)まことにこの「近代資本主義」の著者、老いてますます眞理探求に精進するゾムバルトの姿こそは、現代経済學界における一偉觀であり、その特色のある思想は今日の思想界において、異様な光彩を放ちつゝあるものといはねばならない。

(註) 一九三三年、ゾムバルトの生誕七十年を期して、彼の弟子たちによつて彼の胸像が建てられ、また有名な経済學雜誌「シュモラー年報」の編輯者たちは、とくに彼のために記念號を發行して、その業績に最大の讃辭をさしげた。このことについては尙ほ後述するつもりである。

では、かやうなゾムバルトの思想の特色は、どんな點にあるであらうか。それはこの附録全體の主題であるが、もし強ひて一言にしていはうとするなら、それは彼の幾つかの代表的著述にあらはれてゐるところの、類ひのない包括性と具體性であるといひ得るであらう。たとへば彼の名著「近代資本主義」あるひは経済學方法論についての名著「三つの経済學」を學んだものは、たゞちにこのことを承認するであらう。今日、ゾムバルトに並ん

でドイツにおける最も有力な経済理論家としては、オットマール・シュパンとゴットル・オットリエンフェルトとが挙げられねばならない。シュパンの著作に接して誰人もが感得せしめられるのは、その信念に對する比類のない強烈さであらう。恰かも宗教的確信かのやうに、彼はその思想の根柢を吾々のまへに投げつける。最高の存在者から次第に下位の全體へと降下し、ふたゝび最高の全體へと歸つてゆく精神の「分岐」を説くとき、吾々は中世神祕家たちの教説を想起せずにはゐられない。彼は一個の豫言者ともいひ得るであらう。自由主義と社會主義とに對する彼の敢然たる闘争が、多くの後繼者に深い共鳴をあたへたのは當然のことといはねばならぬ。之に比してゴットル・オットリエンフェルトの學風をもし一言にして盡くしうるとすれば、それはその論理的思惟の誠實さにあるといつて差支へないであらう。それは傳統的概念のあらゆる桎梏から經濟學を解放しようとするひたむきな努力である。あたかもベーコンが思考の四つの偶像を排斥したやうに、彼は硬化した既成の經濟學を破壊して、新しい思考の出發點に立ちかへらうとする。——ではその出發點とは何であるか。それはベーコンにおいては自然の事物そのものであつたのに對して、ゴットルにおいてはそれは人間共同生活の事實そのものである。一見晦澁な彼の文章の背後にひそんでゐるものは、經濟學を共同生活の事實に即して新たに建設しようとする、一貫した努力にほかならぬのである。

この二人の經濟思想家に比較するときゾムバルトの特色はもはや明瞭である。それは深奥な論理の反省であるよりも、むしろ具體的・歴史的なものへの切實なる關心であり、あらゆるものを包括的に認識し理解しようとする

る廣い觀察力である。彼にもまたシュパンのやうに強烈な信念がないのではない。また彼に鋭利な理論的判別力が缺けてゐるのでもない。けれどもそれらはもう一つの彼の特質——具體的、包括的な觀察力と結合してはじめて意味をおびてくるのである。まことに彼が青年時代にまづイタリーの農民の窮狀を分析しようとしたとき以來、彼の興味の対象は労働者階級の現状の研究から労働運動の歴史へ、また更に資本主義社會全體の觀察から最近における人間學の完成にいたるまで、その折々によつて推移しはしたけれども、その間つねに彼の研究欲を刺戟してゐたものは、人間社會の本質と多様性とを捕捉し解明しようとするものであつた。具體的認識への強烈な欲望！この敬虔な眞理探求者が、人間生活のあらゆる豊富多彩なすがたを知りつくさうとしてゐる姿は、あたかもあのファウストの強烈な欲望にも比較しうるであらう。

世界をその最奥において統べてゐるもの

それが何であるかを私は知らうとした、——

だが、ゾムバルトの特質は決して單にこれのみではない。あたかも書齋のファウストがメフィストの誘惑に抗らひ得ないやうに、ゾムバルトもまた實踐的活動への衝動を抑壓しきすることは出来ない。理想社會への情熱が、しばしば彼を靜觀の山から驅りたてるのである。——認識への欲望と實踐への衝動。彼はこの二つのものゝあひだに靈魂を磨滅する。この點においてゾムバルトはすべてドイツ民族の生んだ偉大なる精神の所有者、ことにゲーテと内面的に一致してゐるといへよう。知識の淨福な世界に安住しようとはせずに、ゲーテはつねに新たに實

踐の世界へと自己を鞭うつ。だがゲーテにおいては、その實踐生活への衝動は結局において——彼の時代にふさはしく——現存の社會秩序を是認して、自己に與へられた社會的使命にいそむることによつて人類に奉仕することのみをもつて足れりとしたのであるが、それとは異つてゾムバルトはもはや現存の秩序を肯定することは出来ない。彼の實踐への情熱は、おのづから社會改革の方向をとるよりほかに道はない。資本主義社會を止揚してヨリ高い經濟社會の創造に力を用ひること、それが彼の一貫して渝はらぬ第二の目標である。——だとすれば、彼は如何なる社會を、どんな方法によつて招来しようとしてゐるのであるか。社會改革についての彼の思想の特色は何であるか。このことこそ、多くの人々がゾムバルトを誤解し、はげしく非難したところのものである。そこで吾々は次に、まづ彼の比較的最近の著「ドイツ社會主義」をとつてその要點を考察し、ついで彼がマルキシズムを奉じてゐた時代の思想を検討することによつて、彼の改革思想の本質を瞭らかにしようと思ふ。

二 ゾムバルトの民族社會主義

一九三四年秋、すなはちナチスがドイツの政權を獲得して一年餘のうちに、ベルリンの一書肆からゾムバルトの著「ドイツ社會主義」^(註)が出版された。それは菊判三六三頁の力著であり、この老大家が未來の社會建設の構想を込がいたものであつた。この新著の出版を聞いたときに、彼の名を知る全世界の人々が最初に感じたことは、ふたゝび彼が「轉向」したといふことであつた。かつて(第一次)大戰の前後に彼がマルキシズムの基本理論を

すてたやうに、ふたゝび彼はその科學主義をすて、ナチズムに豹變したのである、と。(今日もなほ吾國にかやうな考へを抱いてゐる人があるとすれば、私はゾムバルトのためといふよりもその人のために、悲しまずにゐられない。)さうしてその轉向の原因は、ナチスの政權獲得にあるものと考へられた。けれども、それは甚しい誤解である。彼は少しも轉向したのではない。彼自身この書の序文にもいつてゐるやうに、この老學者はたゞ時代の狀勢に刺戟されて、年來——すくなくとも十數年あるひは二十年のあひだ——彼の抱懷してゐた社會改革の思想に力づよい表現をあたへたにすぎないのである。そして彼が「ドイツ社會主義」と銘うつてゐるにもかゝらず、その思想は必ずしもナチスの思想に一致するものではない。では、彼の改革思想はいかなる特質をもつてゐるであらうか。それはいかなる點で、ナチズムと異り、またマルキシズムとも異つてゐるのであるか。吾々は簡単にこの書についてみることにしよう。

(註) 邦譯、獨逸社會主義、難波田春夫譯、昭和十一年、三省堂。以下、本書からの引用はすべてこの邦譯による。

彼はまづ現代への批判、その惡魔的な諸情勢への鋭い分析からはじめる。それは資本主義時代とよばれてもいゝが、そこでは經濟と經濟的利益とが他の一切の文化價值にたいして優位をもとめるといふ點で、むしろ「經濟時代」とよぶ方が一層適切である。「この時代においては經濟が、經濟的利益が、したがつてまたこれに關聯して所謂『物質的』重要性が、その他のあらゆる價值に對して優位をもとめ、また獲得して、そのため經濟の特性が、他のすべての社會、文化の方面を特質づけてゐるのである。」(邦譯一頁)そこでは自由の名において

人間のうちに横たはる卑しき本能が跳梁し、しかもそれによつて物質的な富の生産力は著るしく増大したのであるが、それとともに人間社會の紐帶は切斷され、吾々の生活はあらゆる方面において悲惨な、頽廢的なものとなつた。わけでも最大の不幸は、人類が宗教的信仰を喪失するに至つたことである。「人間に加へられた最もひどい打撃は、神の信仰の破壊であり、したがつて現世的存在が一切の超越的關係から解かれたことである。」(邦譯三八頁。傍點原著者)。そしてその一面に、人間は自然の恩寵からも切り離された。「もはや都會の子供は、自然が牧童にさまざまに與へる祕められた刺戟を知らない。鳥の歌ふ聲を知らず、鳥の巢から雛を取つたこともない。空をゆく雲の意味を知らず、嵐や雷のとどろきを聞きわけけることもない。野を走る獸とともに伸びず、したがつて獸の習性をも知らない。」(同頁)。彼はこゝでも飽くまで具體的な事實を示しつゝ、しかも力づくで現代の頽廢を剔抉する。その言はんとするところは、要するに次ぎの言葉のうちに語られてゐるものである。「この一世紀の間に西歐とアメリカに何が起つたかを理解しうるものは、たゞ惡魔の力を信ずる人のみであらう。といふのは、われわれが體驗して來たことは、全く惡魔のしわざとのみ見られるからである。」(邦譯三頁)

この頽廢の中にあつて、吾々は一體何に希望をかけるであらうか。マルキシズムか——否！吾々はもはやマルクスのやうに資本主義が必然的な過程をへて未來の完全な社會——物質的福祉にみちみちた社會——に到達すると考へることは出来ない。それは經濟時代における物質主義的、自然主義的精神そのものからうまれた卑しい迷信にしかすぎない。いはんやその發展が憎惡を武器として、絶對的な階級闘争によつて招來されると考へる

程、大きな誤謬はない。では何によつて吾々は希望をつなぎうるだらうか。それは經濟時代からの全面的な轉向によつて——すなはち經濟時代にたいして全く對蹠的な精神と秩序とを、吾々自身の自由な構成意志によりつくり出すことによつてである。資本主義そのもの、指し示す方向に、吾々はもはや希望をよせることは不可能である。歴史の方向からの引き返へしによつてのみ、吾々は自らを救済しうるであらう。「歴史過程の正しき理解に對しては、たゞ一つ反駁し得ぬ經驗的事實がある。それはわれわれ人間が自由に行爲しうるといふ確實性、これである。すべての運動は、社會主義運動の如きもまた、この確實性から出發しなければならぬ。」(傍點原著者——しかもかくして樹立さるべき未來の社會秩序の諸原理は、あらゆる國々において同一であるべきではない。「マルキシズムの綱領一元主義もまた、成立し得ない。あらゆる資本主義文化の國々に於ける發展が、事實上同一であつたとするならば、……綱領の一元性は是認せられるであらう。しかしこれらの事實は存在しない。……果してしからば、どうして將來の經濟組織は、プロレタリア社會主義の説くが如き貧弱な單一形式のものであり得よう。」(邦譯一三七頁)。かくしてドイツ的なる社會主義、即ちドイツ國民のもつ本質的特徴に最もよく適合した社會主義こそが、吾々の當面の課題であらねばならない。

ドイツ的なること——それは吾々の行動を規律するところの價值標準であるが、それは單なる理論的認識によつては決して把握されえない。「かゝる民族精神は悟性の範疇や經驗の分析を以て認識するを得ない。われわれはたゞ内觀の方法によつてのみ、それをもつに到る。それは民族における偉人の言行によつて、われわれに啓示

せられる。ゲーテの詩、ベートーヴェンの交響樂、寺院、城廓の建築、一將帥の戰勝、爲政者や哲學者の勞營のなかに啓示せられるのである。われわれはたゞそれを信する、われわれみづからそれを見ることができたがゆゑに。豫言者、詩人、指導者がわれわれに知らせるがゆゑに。」(邦譯一八三頁)。かくしてゾムバルトのみるところに依れば、ドイツ民族は三つの本質的特徴をもつてゐる。即ち(1)精神的(非物質的)なること、(2)行動的なること、(3)多樣的なること、がそれである。彼はこゝで諸外國の影響(古代ギリシア及びローマ、キリスト教等)をすべて斥けようとする人々を「僞豫言者」として攻撃しながらも、ドイツ民族の歴史のうちに聳立する偉大な精神的性格に、ふかい讚美のこゝばを投げてゐるのである。

かやうなドイツ的特質を基礎として建設さるべき未來社會——それはどんな形をもつてゐるであらうか。とくにその中の政治生活及び經濟生活は如何。ゾムバルトは最後の二つの章で、この問題に答へようとする。といつても吾々はこゝで「新アトランティス」や「無何有郷だより」のやうな面白さを求めることは出来ない。彼は所詮學者であつて、空想的作家ではない。具體的現實的なものへの觀察力と、その描寫とにすぐれてゐるゾムバルトの性格は、未だどこにも實現されてゐない社會の形態をこまごまと構成することに適當してはゐない。彼が描いてゐるのは裝飾も調度もないビルディングの輪廓、しかも二三の主要な特徴にしかすぎない。——政治生活の領域においては、彼は指導者原理を基礎として身分的な國民組織がつくれねばならないことを強調する。かうした身分組織は、主として職業種別を標準として構成されるものであるが、しかし必ずしも常にさうである必

要はない。「國家は片目のものや髪の赤いものを、身分として構成することもできる」。けれども「經濟身分を構成するときには『主たる職業』の同一であることが分類原理を與へるであらう。……國家は一定の經濟組織に屬することによつて『手工業者の身分』を、一階級に屬することによつて『産業労働者の身分』を、一つの經濟部門に屬することによつて『農業身分』を……構成」しうるであらう。

次に經濟生活の領域においては、一國を單位とする完全な計畫經濟が樹立されねばならないことを力説する。「ドイツ社會主義が從來の世界經濟の構成を、その根本的本質上否定することは明かである。」「われわれが思ひ浮べる指導理念としての『全體』は、集まつて一つの調和ある統一をなす國民經濟である。このことよりして國民經濟は、みづからのうちに、一種の無缺にして完結せる自足性を有することを示さねばならぬことが明かとなる。』しかもゾムバルトによれば、この計畫經濟は三つの基本原理のうへに樹立されねばならない。即ち(1)全體性の原理、(2)統一性の原理、(3)多様性の原理がそれである。(この點についての主張は、彼が本書より二年前(一九三二年)に上梓した小冊子「資本主義の將來」に説いてゐるものと大同小異である。彼が全體性といふのは、計畫化が經濟の全領域にわたらねばならないことを、統一性といふのはその經濟計畫が國民經濟内の唯一の中心點から發しなければならぬこと、また多様性といふのは統制經濟の形態が各經濟部門に應じて異らねばならぬことをいふのである。)

以上、吾々の紹介は決して充分ではない。こゝにはたゞ、彼の改革思想の根本的特徴がいかなるものであるかを發見しようとしたにすぎない。以上の簡単な説明によつてもゾムバルトの改革思想が、かつてマルキシズムを出發點としたにも拘はらず、いまやマルキシズムとは著るしく異つたものとなつてゐるばかりか、ヒットラー一派のナチズムともまた相違する點のあることを知りうるであらう。ナチスの立場にある思想家たちが彼の主張に、充分な賛意をしめすことを吝んでゐるのも當然である。たとへばウイスケマンはこの書についていふ——「彼の『ドイツ社會主義』はゾムバルトを國民社會主義と結びつける點よりも、彼を新しい獨逸の體制から引き離す點をよく表はしてゐる。彼には……シュバンがその據りどころとする、かの形而上學的・宗教的基礎もなく、又彼は根本において國民社會主義の人種的民族的基礎を承認するでもない」と。^(註)

(註) Wisemann und Lütke, Der Weg der deutschen Volkswirtschaftslehre. Ihre Schöpfer und Gestalter, 1937. 金子弘邦譯、三四四頁。

だとすればゾムバルトの社會主義を「ドイツ社會主義」とよぶのは彼一個の名稱なのであり、吾々はこの思想——彼がこの二十年あるひはそれ以上の間に育くみ、發展せしめたところの——にたいして、むしろ「ゾムバルト社會主義」とよぶことが適當だと感じるであらう。吾々はその思想の特色を一層明瞭にするために、こゝにその三四の本質的特徴とおもはれるものを、簡単に列挙してみよう。

一、マルキシズムとは異つて民族及び國家が、改革の過程においても目標においても、一つの重要な役割をあ

たへられてゐると。この點はナチスの抱懐する思想に近いけれども、ナチスの擡頭より以前に彼がこの思想を抱いてゐたことについては後述する。(この點に關するかぎり、彼はマルクスよりも寧ろラサールの影響をうけてゐると思はれる。)

二、マルクスと異つて歴史が辯證法的な必然的法則によつて進化するものとは考へられてゐないこと。ゾムバルトにとつては資本主義は決して未來の完全な社會主義社會を生み出すべき母胎ではない。社會主義社會實現のためには現代からの「全面的轉向」が必要であり、しかもその轉向は吾々の自發的意志によつて行はれるより外はないのである。

三、階級闘争理論の否定。惡によつて善のうまれること——憎惡を武器として利害のために戦ふことにより、完全な調和の社會が到來するとの教説を、ゾムバルトはもはや信じようとはしない。現實についてみても「經濟時代」からの解放は全階級にわたつての問題であつて、諸階級間には絶對的な利害の對立は存在しないのである。四、次ぎにはナチズムから異なる點として、民族が一つの生命をもつ有機體であるとは考へられないこと。民族有機體説は、彼によれば寧ろ自然主義思想にもとづく謬論である。彼の言葉——「民族は民族の部分たる有機體、幾百萬の民族の成員たる有機體より成る。」「民族を有機體とし、したがつて一つの心情を有するものとすることは、を暗き神祕主義に他ならない。それを『有機體以上のもの』とすることは、一つの逃げ路であらう。『有機體以上のもの』はまさしく有機體ではないからである。」(邦譯一六〇頁)

五、北歐民族の優越性にたいする確信が偏狹でなく、かなり自由な立場にあること。むしろ彼によれば、各民族はそれぞれ独自の價值と意義とをもつてゐる。北方的なるもののみが最高のものではない。この點もまたナチスの純粹な立場からは決して快くはないであらう。殊に基督教及び古代文化の遺産にたいして深い畏敬を抱いてゐることは注目されねばならない。

慧眼な讀者はすでに洞察されてしまつたことと思ふが、かうしたゾムバルトの改革思想は決して一朝一夕にうまれ出てきたものではない。その根本思想は一九三二——三三年におけるナチス擡頭よりも遙かに早く、彼のたゆみない觀察と思索とによつて生まれ、かつ成熟してゐたのである。もちろん、かうした彼の立場が明瞭な形をもちつゝ現はれてきたのは、やうやく(第一次)世界大戰の怒濤の前後であつたことは、前にも一言したとおりである。けれども吾々はすでにその以前、彼がマルキシズムを奉じ、すぐれたマルキシズムの理論家として喝采を博してゐた時代において、かうした傾向が——少くとも萌芽として——存在してゐたことを看過してはならない。とはいへ、その時代における彼のすがたのうちには、後年の彼とは著るしく異つたものゝあつたことも、否定することは出来ない。吾々は次ぎに、彼が純粹なマルキシズム理論家と看做されてゐた當時における、その思想の特徴を瞭らかにすることゝしよう。

三 若き日のゾムバルト

一八九六年の夏、スキス國チューリッヒに集まつた歐洲諸國の學者、教育家をまへにして、ゾムバルトは數回の連續講演をこゝろみた。それは「スキス國倫理文化協會」からの委囑によるものであつて、その講演の題目は「十九世紀における社會主義と社會運動」であつた。ゾムバルトは當時三十三歳、ブレスラウ大學教授の地位にあり、「赤い教授」として漸やくドイツ學界の視聽をあつめつゝある時代であつた。のちに小冊子のかたちで出版されたこの講演の内容が、ドイツの讀書界のみならず、世界各國の言語に翻譯されて十九——二十世紀の交、マルキシズムの普及に大きい貢獻をしたことは周知のとほりである。わけてもロシアには深い影響をあたへたのであり、のちにロシア革命の擔當者となつたマルキストたちが此の書からうけた印象は、決して淺からぬものであつた。だが著者ゾムバルトは、社會主義についての彼の研究が深化するにつれて、次第に此書に改訂補充をくはへ、第七版（一九一九年）はすでに最初の小冊子に比してかなり内容の異なるものとなつたが、更に一九二四年の第十版はその書名も「プロレタリア社會主義」(Der Proletarische Sozialismus)と改められて、マルキシズムへの鋭い批判をその内容とするに至つた。これに對して如何に多くの冷評が加へられたかは前述のごとくであつて、茲にくり返す必要はないであらう。^(註)

(註) 「社會主義と社會運動」第七版からの林要氏の邦譯があり、他に一、二種の邦譯もある。——「プロレタリア社會主義」にたいする比較的公平な批評とおもはれるカール・ランダウアーの言葉でさへも次ぎの通りである、「此書は全體として、憎惡の充ちた書物である。裁判官の批判ではなくて、告誡者の辯論であり、その奥深い造詣は、對象への正しい評價

のためではなく、むしろ舌端を鋭くするために役立てられてゐる。」けれども「彼(ゾムバルト)の大きな功績は、階級闘争の思想それ自身と、その絶對化とを區別したといふことである。」と。Carl Landauer *Planwirtschaft und Verkehrswirtschaft*, 1931. (拙譯「計畫經濟と流通經濟」昭和九年)

吾々はいま此書の最初の形——僅々百頁内外にすぎぬ小冊子に盛られたスキス講演の内容を一瞥して、その當時における若きゾムバルトの姿を髣髴たらしめることゝしよう。^(註)

(註) ゾムバルト自身この講演に加筆して上梓した一八九六年初版の小冊子は遺憾ながら私の手に入らないので、以下の紹介は一八九七年に「スキス國倫理文化協會」から出版された講演の速記によることとする。

ゾムバルトはまづ、世界史の發展原理にたいする反省をもつて此の講演に吾々をひきいれる。カール・マルクスが人類の歴史を階級闘争の歴史であるとよんだのは、誤りではないけれども一面的眞理にしかすぎない。むしろ現實の歴史は二つの極點をめぐつて進行するものと云ひうる。その一つは民族相互間の對立抗争であり、他の一つは民族内部における社會階級間の對立抗争である。そして今や吾々は著るしい民族的闘争の一時代ののちに、激烈な社會的抗争の時代に入つてゐるのであり、吾々のまへには歴史的現實としての社會運動が、ひろく展開されてゐるのである。

この社會運動を知るためには、吾々はその歴史的特性に即してそれを理解しなければならない。近代社會運動の顯著な特徴は、第一にはその目標が社會主義、即ち私有財産の否定(少くとも生産手段について)にあるとい

ふことであり、第二にはその運動の擔當者がプロレタリアート、即ち自由賃銀労働者であることである。いふまでもなく、このプロレタリアートは一定の經濟組織、即ち資本主義經濟組織によつてはじめて發生するに至つた。資本主義の擔當者はブルジョアジーであり、その歴史的使命は今日みるやうな物質的生産力の驚異的發展にあつたが、この資本主義こそは近代プロレタリアートと、その生活の慘狀を生みだしたものである。資本主義生産方法の普及につれて舊き社會的紐帶（村の生活、家庭生活、習俗等）は根本から破壊されて、人口の大多數は都市に密集したのであるが、その都市において彼等を待つてゐたものは不健康な生活環境であり、いつ明日の糧を失ふかも知れない生活の不安であつた。しかも、かうした工場生活の中からは別種の團體意識が、新しい形態をもつて現はれてゆく。ゾムバルトの生々とした具體的描寫の迫力は、すでにこゝに現はれてゐる。彼はいふ——

「たとへば諸君はゾラやゲレ（Göhre）をよみ返して、その美しい描寫のうちに、舊い郷土や家庭や習俗のきづなが消え去る一方、大衆のうちに如何に協同意識が魔法のやうに突然に生まれ出るかを見られるがよからう」と。

かうした情勢のもとに、アダム・スミスとその後繼者とが資本主義の機構を最初に理解し、認識してからのち、この機構にあきたらぬ人々と思つたのは當然である。そのうち改良主義的の立場にあるもの（ラムネー、キングスレー、シスモンディ等）は姑く措き、現存の秩序を根本から排除しようとするもの（中にも、退嬰的と進歩的との二つの方向がある。退嬰的といふのは中世的秩序に復歸しようとするものであり、アダム・ミュラー等がそれである。この傾向は今日では潮流といふよりも、むしろ小流と化したかの觀がある。これに對して進

歩的、即ち大規模生産を肯定しつゝ、その犠牲者である産業プロレタリアートを救はうとするものは、本來の意味の社會主義者であり、現在社會運動の主流をなすものであるが、その初期の代表者は空想的傾向をもつ人々——そのうち有名なのはサン・シモンとフリーエであるが、最も興味深いのはオーエンである——であつた。彼等の特徴は十八世紀に特有な樂觀主義的世界觀のうへに立つて人間本性の善であること、したがつて今日の社會が種種の害惡を有するのは人々に正しい知識が缺如してゐる爲にすぎぬと信じてゐたことである。それゆゑ彼等はあらゆる人々、とくに富裕な人々の善意に訴へた。フリーエがその自宅で毎日正午から一時まで、富める人々が彼の事業への寄附を申出るので待つてゐた姿は、彼等の思想を象徴するものである。——もちろん誰ひとり訪れたものはなかつた。

プロレタリアートを解放しようとするかうした初期の社會主義思想家が現はれたのちにも、なほ大衆自身の手による社會運動の實踐があらはれるまでには、久しい期間を経なければならなかつた。かうした意味での最初の社會運動は一八三七——四八年におけるチャーティスト運動であつた。それは労働者自身を指導者とし、十年にわたつて組織的に戦はれたのである。とはいへ、それは未だ明白な無産者の綱領と目標とを缺如してゐたのであり、その限りでは、むしろ社會運動前史といふべきものである。——かくしてゾムバルトは一八五〇年の頃から一八九〇年前後までの歐洲社會運動の歴史を簡單に敘述する。その間における顯著な事實は、この運動がまづ英國、フランス、ドイツの諸國においてそれぞれ異つた傾向をもつて擡頭しながら、次第に相觸れて互ひに影響

をうけ、つひに國際的な一大運動にまで展開したといふことである。と同時に注目すべきことは、この過程につれてたゞ一人の思想家——カール・マルクスの精神が、全運動のうちに指導的地位を占めるに至るといふことである。

マルクス——この十九世紀最大の社會哲學者はするどい判別力と、人間心理の奥底を看破するすぐれた眼識をもつてゐた。もちろん彼のうちには多くの異なる思想傾向の影響が混在してゐるのは明瞭である。けれども彼の偉大さは、それらの諸思想を受容し綜合して、一つの渾然たる體系を形成したといふことである。彼の「共產黨宣言」は短い言葉のうちに、労働運動のすゝむべき方向を力づよく指し示した。その方向は個々の思想家の考案によつてはなくて、世界史の發展法則そのものゝ中から認識されねばならない。かくして労働運動の目標（生産手段の社會化）と手段（階級闘争）とは瞭らかにされた。マルクス以來社會主義はもはや知識の問題ではなく意志の問題となるに至つたのである。

最後にゾムバルトは、二三の残された問題をとりあげて——それは主としてマルキシズムの解釋の問題であつて、こゝに吾々は彼自身の見解があらはれてゐるとみるべきであらう、——簡単に考察する。第一にマルクスの歴史觀は一言にしていへば進化 (Evolution) の理論であるが、その意味は決して未來の社會主義社會が、無爲にして必然的に到來すると考へられてはならない。歴史の法則は自然法則のやうな意味での必然的法則では決してありえない。現實の歴史においては、一定の目的のために吾々が一定の手段をとるときにすら、それが成功す

るか否かは明確ではない。階級闘争が場合によつては社會主義ではなく、西歐文化の没落にみちびく虞れがないと、誰人が保證しえようか。——次ぎには階級闘争そのものについてである。吾々はかうした闘争が歴史發展のうへに避けえないものであることを、明瞭に知らねばならない。ブルジョアジーが自發的にその特權を讓渡するであらうと考へてゐる人々にたいして、理論的にそれを辯駁する方法はない。しかし少くとも私——ゾムバルト——はそれが不可能であると考へる。個々の例としてならば知らず、社會的階級全體としては不可能である。——「私自身の立場についていへば、もちろん私はこの闘争をよろこぶ。闘争にのみ生命がある。……よし、さらば闘争はう！ 何故それでは悪いのか。」——けれどもゾムバルトはこの闘争に一つの條件をあたへようとする。即ち法律理念への尊重は、この闘争の當事者たちによつてかたく守られねばならない。「やがて實現さるべきものが確乎とした法的秩序となりうるために、そして吾々が混沌に墮しないためにも、吾々はぜひとも法律理念への信頼を維持しなければならない。」かくして此のたゞかひは、方法をわきまへぬ破壊的、非道德的なものであつてはならない。階級闘争のもとにおいても、吾々は反對者の立場を充分に尊重しなければならない。けだし若しこの闘争が歴史的に必然的なものであるならば、吾々は反對者を單に惡意の人間の集合と考へることは出來ないからである。

スキス講演の内容は、ほゞ以上のとおりである。ここにみるものが果して純粹の意味でのマルキストのすがた
ゾムバルトの學說と生涯

であらうか。——否！ 少しく注意してゾムバルトの思想の方向をたどる者は、彼が決して本質的意味においてマルキストではなかつたことを知るであらう。當時彼がみづから自己を一個のマルキストとよんでゐたこと(註)そのことは單にこの若き學徒が、マルクスからいかに多くを學んだか——殊にその問題提起の方法において——を物語るところの謙遜な告白にすぎないのである。表面的にみれば、當時の彼はたしかにマルキストの名に價ひするでもあらう。けれども、その外衣の背後に秘められてゐるものは、それとは全く異るところの彼の本質——この本質をもし一言にしていひうるとすれば、それは理想主義のうへに立つところの國家社會主義者にほかならないのである。

(註) 之については後述参照。

このことについて、吾々はたゞ二つの點のみを指摘しておきたい。まづ、國家の役割についての積極的見解が、すでにこゝに暗示されてゐることは別としても、もつとも注目しなければならぬのは階級闘争にたいする彼の立場である。彼はそれを肯定する——だが、彼には一つの決定的な條件がある。文化の没落と混沌とが、この闘争の悲劇的結果となることを避けるためには、單なる闘争のための闘争——絶對的闘争は斷乎として排斥されねばならない。彼が希望し、期待してゐる事柄は、この闘争の兩當事者がすぐれた共同の目的——この闘争によつて社會の發展に貢獻しようとする高貴なる意圖——をもつて戦ふことである。單なる憎惡によつてはなく、むしろ多量の理性と少量の憎惡とに、彼はもつばら期待をかけてゐるのである。

このことに關聯して、彼は社會の發展が自然法則と同一の意味において客觀的、必然的なものではないことを、すでにこゝに暗示してゐる。何故といふに、人間の歴史をつくるものは結局において人間そのものであり、その他の外部的なものではないからである。すでに吾々は後年のゾムバルトの立場——後述するやうに歴史をもつばら人間精神の所産であるとし、精神科學における必然性と自然科學的必然性とを嚴密に區別して、歴史のうちに必然性の存在しないことを強調する立場——が、漠然としてあるが萌芽のごときものとして、ここに存在してゐることを見るのである。

かやうな彼が、一九一四—一八年の世界大戰前後における社會的動搖に逢會して、マルキシズムの根本的批判へと如何に自己を驅り立てざるをえなかつたかを、吾々は容易に理解しうるであらう。社會主義運動の現實の動向を目撃し、更にこれに對比して、歐洲列國における資本主義の其後の發展をつぶさに觀察したゾムバルトは、つひに階級闘争への最後の希望を棄てざるをえなかつた。しかも資本主義が自己發展によつて社會主義社會に到達するとの確信をも、抛棄せざるを得なかつたのである。かくして彼が、どんな最後の確信に到達したかは、すでに吾々の考察したとほりである。

だが、この間における彼の思想的發展は、單に社會主義者としての彼の信念をくつがへしたのみではなかつた。彼は科學としての經濟學の方法論についても、從來の自己の立場を更に一步、前進せしめることが出来たのである。それは、いふ迄もなく經濟學における「了解的方法」の確立なのであり、この純粹理論的な立場からもまた

マルキシズムの誤謬を鋭く批判し得るに至つた。では、この「了解的方法」に彼はいかにして到達したのか。またその内容はいかなるものであるか。吾々は次ぎにこの點を、出来るかぎり簡潔に紹介し批判してみようと思ふ。

(未完)



昭和十五年十二月二十五日印
昭和十五年十二月三十日發行

刷 高度資本主義 I
行 定價金參圓八拾錢

(外地定價四圓二十錢)

譯 者

梶 山 力
かぢ やま つとむ

發 行者

江 草 重 忠
えぐさ ちゅう ちゅう

印 刷 者

白 井 赫 太 郎
しらい かく たらう

發 行 所

書 肆 有 斐 閣

東京市神田區神保町二丁目十七番地
本 店 電話九段三三二・三三三番
振替口座東京三七〇番
東京市本郷區(帝大正門前)
本郷支店 電話小石川一九二〇番

東京 精興 社 神田

K 18

マックス・ウェーバー著
梶山力譯

〔經濟學名著翻譯叢書4〕

プロテスタンティズムの

倫理と資本主義の精神

総頁数 三三
総判価 二八三
布装 二〇四

近世歐洲文化の起源如何の問題は特に二十世紀の初頭に於て「資本主義精神起源論」と云ふ形を以て、論争と研究の對象となつた。これらの研究中心問題を徹底的に解明し深い影響を永く學界及思想界に齎したものは本論文である。近代資本主義精神の重要な一起源が基督教殊にカルヴィニズムにあるを論證せんとした本書は、他方社會科學の方法論に付ての独自の思想をも研究の中に實踐せらる。

901
137

終